

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷九十二第

行發日一月七年四和昭

## 論 叢

消費稅の目的及物體

法學博士

神戸 正雄

勞銀の理論

文學博士

高田 保馬

## 說 苑

ケネーの租稅理論

法學士

山口 正太郎

セイの販路說に就て

經濟學士

谷口 吉彦

シュビイトホフの景氣循環論

經濟學士

靜 田 均

## 講 演

我國民經濟の實相

法學士

山室 宗文

## 雜 錄

再び佐田介石に就いて

經濟學博士

本庄 榮治郎

プロイセンの地方稅制

經濟學士

安田 元七

動大量と靜大量

經濟學士

木村 喜一郎

最近フランス經濟學界の傾向

經濟學士

松岡 孝兒

最近英國に於ける豫算の業績

經濟學士

中川 與之助

近著外國經濟雜誌主要論題

## 輓近フランス經濟學界の傾向<sup>1)</sup>

松岡孝兒

一  
方法論から見た輓近フランス經濟學界の最も主要な傾向は、極めて總括的に云つて、次の特徴を有つ。即ち方法論上一方的極端的態度を排斥してゐることこれであつて、換言すれば抽象的方法のみをとる立場又は實證的方法のみをとる立場に對する反對である。この點は、所謂純粹理論的であると云はれる人によつてもまた純粹記述的であると云はれる人によつても同様に認められてゐるやうである。

### 二

かくの如く一方主義を斥けんとするの思想は、遂に大多數の學者をして一見、方法論上の論争を斷念せしめるに至り、従つてかくの如き點に於る論争は、過去に於てのみ認められたものであつて最近に於ては徒に相互的な誇張を生ぜしめるのみで何等實益なしと考へられるに至つてゐるやうである。だから此の種の論者に従ふと、經濟學上に於る眞の方法論は、全く折衷的なものにある、即ち歸納と演繹とが併用され、唯比較

1) 本文は Revue d'économie politique, No. 6. 42 année 所載論文 La méthode et l'ordonnement de la science économique chez les économistes français contemporains par Gaëtan Pirou の要旨を紹介せんとするものである。

的に演繹の方が大きな役割をつとめてゐるのである。蓋し經濟現象は其自體複雜であり且其の實驗は不可能なので、所謂一般經驗科學と稱せられるものよりも演繹に對する要求が大であるからである。此の意味に於る方法論は經驗科學よりは更に内省を重んじ、内省によりて推理を展開さすべき單純なる與件を求め、かくして實驗に代ふるに假定を以てしてゐる。然しかくの如き方法論と雖、常に事實と密接なる關係を維持することに努めてゐるのであり、就中その出發點に於てはその演繹をして誤りなからしめるために、その結論に於ては其の結果を批判し得るために、常にその取扱ふ現象を事實に即して觀察することに努めてゐるものである。要するに經濟學に於る方法論は、普通學問に於ると等しく、よしんば歸納の適用が容易でないといふことから、演繹が多少多くは用ひられるかもしれないけれども、觀察と假定と吟味とが常に之に伴つてゐる、これが即ち折衷說である。

かくの如き折衷說の注目すべき點は、數理經濟學に

對する批判の微溫的な態度である。即ちこの論者によると、數學による形式は生硬且單純であつて變化多岐しかも多種多様な事實を適當に捕捉することができない、従つて具體的な經濟生活を説明し得ないと説いてゐるが、併し又反面には絶對的に數理經濟學を否定するものでもなく、寧ろ其の内容にとるべきものあることを説いてゐる。例へばコルソン (Colson)——氏は屢と過つて經濟學に數學的形式を採用すると思はれてゐるが、それは氏がフランスに於て物價理論を明かにする爲にグラフを用ひた最初の學者の一人であるからである——は數理經濟學による説明は、單純な場合である限りそれは通常の言葉で表現されるものであるし、又單純な場合でない限りそれは著しく現實から遠ざかつてゐる處があると云つて批難してゐるが、又他の場合に於ては數學的形式を用ひることから興味ある結果を求めることができ、更に數學的形式は一定現象の性質を捕捉し一定法則の意味及限界を決定するに際して、比較又は類推を容易ならしめるものであると云つ

て其の利益を説いてゐるが如き即ちこれである。<sup>2)</sup>

かくの如き意味に於ける折衷的方法論は、既成論者によつては便宜なものとして採用されてゐるけれども、新に經濟學體系を打建てんとする人々にとつては容れられてない。そこで經濟學の根本體系を打建てんとする人々にとつては、其出發點として内省又は常識によつて認められた單純なる與件をとるか、或は又客觀的に觀察された經濟的事實をとるかこの二つに對する選擇的態度が必然的に要求されることになる。前の意味に於て經濟學を取扱つた人にボーダン (Bodin)、オーブチ (Aupetit)、ルノアール (Lenoir)、リュエフ (Rueff)、デイヴィジア (Division) があり、後の意味に於て取扱つた人にシミアン (Simand) がある。

### III

ボーダンは抽象的な單純經濟なるものを論じてゐるが、同時に又この抽象はこれにより實在が甚しく歪められることがないやうに用ひらるべきものであると述べてゐる。

オーブチ<sup>4)</sup>は理論經濟學と共に實驗經濟學の正當性と必然性を認めてゐる。彼によると、この二つの區別は普通抽象論者によつて用ひられてゐる純粹經濟學と應用經濟學との區別と同じものではない。蓋し彼れの實驗經濟學は正に彼れの理論經濟學と同じ問題を取扱ひ同じ結論を得てゐるからである。彼は明かに此兩者は同じ目的を追求するものであると云つてゐる。彼によれば此の二つのものを別々に用ふることが科學的なるかの如くに見えるが、併し彼れの理論經濟學の抽象的法則と實驗經濟學の實驗法則との間には一致點があり、その一致點に於てはその法則は理論實驗兩經濟學の何れに對しても眞理である。

ルノアール<sup>5)</sup>は次のやうな二つの相對立せる研究方法を採つてゐる。即ち第一は一般的觀察による心理的事實から出發し、抽象的哲學的方法によつて經濟的靜態を明かにするものである。之に對立する第二の方法は統計的觀察及比較によつて經濟的動態を示さんとするものである。

- 2) Colson, Cours d'économie politique. T. I. p. 49.
- 3) Bodin, Principes de science économique. 1926.
- 4) Aupetit, Essai sur la théorie générale de la monnaie. 1901.
- 5) Lenoir, Etudes sur la formation et le mouvement des prix. 1913

尙ほ又リユエフは、『ユークリッド經濟學』の名の下に、純粹理論經濟學の體系を考へ、經濟學に於る法則は統計的法則であるとし、更にその近著『貨幣現象に關する理論』に於ては其理論と最近十年間の事實による實證的報告とを比較發表してゐる。

最後にドイツは、經濟學には實驗が用ひられないので、極めて廣く推理によらなければならぬと述べてゐるが、併し理論經濟學は單に演繹によつてのみ構成せらるべきものでないとも附け加へてゐる。

之を要するにその目的とする法則を實驗的に吟味し、その出發するところの抽象に生命を與へんとする點に於て、フランスに於る新演繹論者はたとひ演繹論を主張するとしても、純粹に抽象的理論的な經濟學的見地にたつものと區別されてゐるやうであり、同時に此の意味に於て前に述べた折衷説と較べて結論はともかく見方の相違があるやうに思はれる。

#### 四

之に反して、社會科學就中經濟學にはあらゆる點に

於て經驗科學に用ひられる方法を用ふることができるといふことは、シミアンによつて唱へられるところである。彼は特にかくの如き方法的問題に大なる關心を拂つた。彼はその方法的主張からして、經濟學は經濟的事實を認識し且説明することを以て目的とするものであるとし、更に抽象的方法に對して次のやうに批難してゐる。それによれば先づ第一に實在には之を私恣的な前提と較べると何等かより本質的なもの、より、特種的なものがあるといふこと、第二に演繹推理の嚴密性は表面的なものに過ぎないこと、従つて演繹の結果が合理的には認めることができるとしても、その觀察が十分でないことがあるといふこと、第三に結局抽象的方法是實在を説明し明瞭にすることはできないものであるといふ點である。

尙ほシミアンの方法的立場に興味と新味とを與へるものは、彼が抽象的經濟學の普通の反對者即ち歴史學派にとつても亦一の對立をしてゐるといふことである。即ち彼は歴史學派が科學的研究の條件を無視して

6) Rueff, Des sciences physiques aux sciences morales, 1913.  
 7) Rueff, Théories des phénomènes monétaires, 1927.  
 8) Divisia, Economique rationnelle, 1128.  
 9) Simiand, La méthode positive en science économique, 1912; Statistique et expérience, 1922.

ゐること、即ち單なる事實の記述のみに其の範圍を限定してゐることは、本來學問なるものが普遍的なるものゝみについて認められるといふこと、且つその普遍的なるものは抽象の必然的作用によつてのみ求められるといふことを理解せざるところのものであると云つてゐるのである。

シミアンによると經濟學と共に科學のあらゆる部門に於て最も有力なるものは、直接觀察される事實から抽象によつて一般的概念に迄高めることができるといふ方法、且又推理の結果を實證的に檢證し得るやうな方法であるやうに思はれる。かくて彼はこの意味からして大いに演繹の價値を認めるのであつて、それは彼が最も細心の注意を拂つた研究の一たる前述『經濟學に於る實證論』なる研究に於て、數理經濟學を認めるに吝かでなかつたほどでも知れることなのである。尤もこゝにいふ數理經濟學の意味には條件がある。即ちその條件といふのは事實から求めた抽象の上に成立するものであつて、個人心理から得た概念の上に成立するものでなく、又その事實には所謂數理

經濟學以外に經濟問題の與件として社會的なるものが存することが必要であるといふことである。

かくの如き方法論が所謂折衷説と異なるところは、經濟學研究に關して演繹と假定とが大なる役割をなすものであるといふことに對する拒絶である。シミアンに反對する論者は、社會的事實が極端に複雑なこと並に經濟現象に關して實驗の行ふべからざることは、科學の見地から、いくら社會的事實を觀察しても何物をも得ることはできないものであることを示すものであるから、従つて演繹と假定とを用ふることは誠にやむを得ないところであると云つてゐるが、之に對してシミアンはデュルケーム (Durkheim) と共に、ベーコン (Bacon) による歸納の四方法中所謂共變法は少くも社會科學に用ひることができ、實際に於ては統計を以て觀察の本質的手段として又抽象の自然的根據として見做すものであると主張してゐる。

かくの如き主張が方法論上若きフランスの經濟學者及社會學者に與へた影響は著しかつた。尤もかくの如

き實証的研究方法に基づく主張は、一方に於ては經濟學の分野に對する社會學の進出を好まない學者の贊成は得にくかつたけれども、又他方に於てアフトリオン(Aftalion)、ノガロ(Nogaro)、リスト(Rist)等の經濟學者は、シミアンと共に統計による正確な分析と比較とによつて重要な科學的眞理の發見に寄與し得ることを主張したのである。<sup>10)</sup>

## 五

輿近フランスの經濟學界に於ては經濟學全般を如何に分類してゐるか又分類せんとしてゐるかを以下少しく述べてみたい。

多くの學者は今尙ほ古典派による分類を襲用してゐる。その主なるものはジード(Gide)、ペー(Perrau)ノガロ(Nogaro)の如き學者であつて、何れも生産流通分配消費の四部門による四分法を採つてゐる。かくの如き分類は一見極めて簡單にして、論理的のやうにも思はれるが、フランスに於ても諸外國と同様吟味を受けてゐる。

先づこの傳統的分類を破つたものはポリエー(Polye)<sup>11)</sup>である。彼は其の經濟原論に於て生産と分配との二分法を採用してゐる。尙ほこの他にも上述の古典派による分類を修正せんとするものはあつたけれども結局、傳統的分類に對する反動を解決することができず、遂には或論者をして組織的分類をば全然放棄せしめるに至つた。ルロア・ポーリウ(Leroy-Beaulieu)、ブレイエー(Brouiller)、ホルソン(Colson)、トリュシイ(Truchy)の如き即ち之である。先づホルソンを例にひくならば、彼れの經濟原論は六卷より成つてゐるが、第一卷は經濟現象の一般理論、第二卷は勞働及勞働者問題、第三卷は資本、自然的要素、有形財の所有、第四卷は商企業及流通、第五卷はフランスの財政及豫算、第六卷は公營事業及運送を取扱つてゐる。更にトリュシイは七部門に分ち、第一に一般概念、第二に生産組織、第三に貨幣信用及物價の構成、第四に國際經濟關係、第五に財の分配、第六に財政、第七に社會問題を論じてゐる。かくの如き分類の弱點は、經濟學

10) フランスに於ける統計的資料は十分とは云へない。統計に關する著書も F. Fure 及 A. Liesse の如きものに限られ他の Bowley, Benini, Mortara の著書に比せらるべきものは未だ發表されてない。尙ほ此等の點に Aftalion, Cours de statistique 1929. 及 Inonnaie et Industrie 中の論文 les prévisions économiques, 1929. 参照。

に彈力ある機構を與へるものでなく、單に經濟學に關する特種な問題の散漫な輯録を與へるにすぎないものであつて、特に之を説明するまでもない。

## 六

最近この分類に對して更に新たな試みが發表された。ボーダンの經濟原論<sup>11)</sup>もこれである。彼れの所謂基礎的分類によると、彼れの經濟學は單純經濟及複合經濟から成立してゐる。彼は此の單純經濟なる用語の規定するところにより正常なる經濟生活を研究せんとするものである。それによれば、單純經濟とは第一に人類がその存在の維持發展の立場に於てのみ活動し、有害なる満足を抑制するが如き社會、第二には外界の財の處分からのみその欲望満足の手段を攝取せんとし、その同胞に對する搾取は之を抑制するが如き社會に於て存在する經濟を意味してゐる。次に複合經濟に關しては之を以て實在に近い經濟即ち實際に搾取及有害なる満足が行はれてゐる經濟を意味するものである。最近に發表されたものは以上の二部門中前者即ち

單純經濟に關するもののみであるが、これに於て彼は、先づ經濟的要素は欲望及財であるとし、次に狀態から靜態に移つて經濟的活動を研究し、引續いて經濟的判斷、經濟行爲（生産交換、満足）經濟活動の結果（均衡及進歩の理論）を考察してゐる。

この新分類は多くの人との興味を惹くこと極めて大であつた。蓋しこの構想はフランスに於る經濟學分類の一般傾向と對立するものだからである。ボーダンの主張は、その研究の出發點に於て、現實的な經濟事實の直接研究から斷然遠ざかつてゐる方法による分類の試みである。既に述べたやうに彼は單純なる抽象を使用し、經濟人の概念をさけ、且つ現實人間の心理を歪めまいとはしてゐるが、要するに演繹的抽象的經濟學を奉ずる學徒であり、この意味に於る學派に屬する經濟學者の受くる批難は又正に彼にも向けらるべきである。かくて彼れの經濟學の體系は、抽象的方法によつて紐立てられた假定的な體系であり、實驗的比較より生ずる確實な要素は何等存在しないのである。尤も此

11) Polier, Cours d'économie politique, 1911, p. 136, et s.

12) Leroy-Béaulieu, Traité théorique et pratique de l'économie politique 1914.

13) Bouillet, Précis d'économie politique, 1912.

14) Colson, Cours d'économie politique, 1907.

15) Truchy, Cours d'économie politique, 1923-1927.



等の點に關する詳細な決定は彼がその複合經濟に關する考を發表した後待たなければならぬことは勿論であるが。

最後にピルーの分類を<sup>17)</sup>あけて本文を終ることゝする。彼の分類はボードンと異り、寧ろその反對である。その分類は單純から複合へではなくして、具體から抽象に趨くものである。第一部に於て經濟生活の構成即ち外部から見た經濟組織即ちそれは時代によつて變化すべきものであり又生産部門により異なるものである、具體的に云へば、經濟生活に關する技術的法律的的研究、歴史的發展及近代的形態に於る農工商交通等の説明、かくの如きものが此部に於て取扱はるべき問題である。第二部に於ては經濟生活の機構を取扱つてゐる。即ち經濟組織の内部に立入つて考察を進めてゐるもので、價值、價格、貨幣、利子、地代、勞賃、利潤の法則及景氣の變動を論じてゐる。第三部は國際經濟關係の研究であつて、國民的單位及び政治的國境の存在から生ずる諸問題に關する研究であるが、第四部

は現在の經濟組織に於る價值判斷による改造體系に伴ふべき理論の研究である。

かくの如き分類はその結果としてかくあるものゝ説明と、かくあるべきものゝ研究とを分離せしめるものであるが今は此の問題には立入らない。之を要するに分類に於ては四分法にもよらず又二分法にもよらず經濟學全體を組織的に有機的に一體として説明し得るが如き分類へと移りつゝある現情こそ、この點に於る観近フランス經濟學界の傾向と云へやう。

10) Bodin, Principes de science économique 1926.

17) Revue d'économie politique, No. 6, 43 année. p. 1497 et s.